

インドにも中国にもなく、日本で始められた仏教行事の代表的なものに、春秋二回のお彼岸があります。

「暑さ寒さも彼岸まで」といわれるように、春の彼岸を迎える頃になると厳しかった冬にも別れを告げ、花の咲き競う春が来て、緑さわやかな初夏に向かいます。

秋の彼岸になれば猛暑も収まり、やがて秋も深まっていきます。

四季の変化に富む日本で、この春秋の彼岸の好季節を選んで、仏道修行の時期と定めて仏事が行われていることは、本当に意義の深いことであります。

「彼岸会」は春分と秋分の日を中日として、前後の三日ずつ計七日の間に行われる法会で、この行事は日本だけに見られるものです。

聖徳太子の頃より始まったともいわれていますが、平安時代初期から朝廷で行われ、江戸時代に年中行事化したといわれています。

また一般の信者はこの間、お寺まいりやお墓まいりをするのが習慣となりました。

私たちの浄土真宗では、蓮如上人までの時代は彼岸会は行われていなかったようですが、上人 59 歳の 1473 年（文明 5 年）に吉崎御坊で彼岸会を修したことが、御文に書かれています。それ以後、今日に至るまで本願寺では絶えることなく、年中行事として七日間、彼岸会の法要が勤められています。

もともと「彼岸」とは季節を表す言葉ではなく、「お浄土」を表す仏教用語であります。

生命を始めとして全てに限りがあり、苦悩に満ちたこの現実の世界の「此岸」から、阿弥陀如来のほろい無量のいのち（寿）と智慧につらぬかれた永遠の安楽国土である「彼岸」のお浄土を渴仰し、いのち終わればそこに生まれることを願うのが彼岸会の本来の意味であります。

私たちはお彼岸を迎えるにあたり、お浄土に想いをはせ、阿弥陀如来に救いとられていった多くの念仏者やご先祖をしのび、お念仏の人生の確かさ、頼もしさを改めて味わいたいものであります。

さて、皆様は、さだまさしさんの「いのちの理由」という曲をご存じですか？

先日、この曲を耳にした時、自然に涙が溢れてきたのを覚えています。

誰もが問いを持ちながら、答えを見つける事が難しい「私が生まれてきた理由」をハッキリと歌詞にされていたからです。

今から 12 年前、宗祖親鸞聖人 750 回御遠忌法要が本山で勤まりました。同じ年に、浄土宗で、「浄土宗宗祖法然上人 8000 年大遠忌」がありました。法然上人は、親鸞聖人のお師匠様ですね。

法然上人と親鸞聖人の亡くなられた年が、ちょうど 50 年違うわけです。それで、50 年ごとの御遠忌法要が、いつも同じ年に勤まるわけです。

浄土宗では、大遠忌を迎えるにあたって、シンガーソングライターのさだ・まさしさんに、記念曲の制作を依頼なさいました。浄土宗はお金があるんですね。

まあ、それはともかく、浄土宗の宗務総長さんが、さだまさしさんの大ファンで、「法然上人のころ」を歌い上げてほしいと注文なされたそうです。

その歌が完成して、2009 年に、知恩院で奉納法要がありました。「いのちの理由」という歌です。

人の出会いの縁を歌った、なかなかいい歌でしたね。

今日は、まず、〈さだ〉さんの「いのちの理由」という歌を聴いていただいてから、話を進めていきたいと思ひます。

歌詞を、お手元のプリントに印刷してありますので、ご覧になりながら、お聴きください。

（さだまさし、アルバム『美しい朝』より 浄土宗 宗祖法然上人 800 年大遠忌 記念曲～「法然共生」イメージソング～）

いかがですか。最後にオーケストラが入って盛り上がるのは、浄土宗さんへの配慮だそうですが、ま

あ、それはともかく、共に生きる人との出会いの縁から、歌は始まります。

人の出会いの縁といいますと、まずは「親子の縁」や「夫婦の縁」を思うわけですが、親子であれ夫婦であれ、人の出会いというものは、まことに不思議なものです。

親子というのはもっとも親密な関係だと思いますが、意識のうへでは、べつに、この子にしようとか、この親にしようなんて、選んだ覚えもないのに、親子になるんです。これは考えてみれば、実に不思議なことですね。

夫婦でも、そうですよ。

恋愛結婚でも、世界中の男の中から、この男を選んだとか、世界中の女の中から、この女を選んだなんてことはありませんね。

何十年も別々に育った見知らぬ二人が、落としたハンカチを拾ってあげたとか、知り合いの紹介だとかいった程度の理由で、生涯をともにすることになるのです。

これは、はたして偶然なのかというと、どうも、偶然というだけでは何か割り切れないものが残るんですね。

偶然というより、むしろ、その二人には、出会わねばならない何か必然のようなものがあつたのではないか。

ということで、その「何か分からない必然のようなもの」を、仏教徒は「縁（えん）」と呼んだんですね。

「袖振そでふり合うもタシヨウの縁」

傍線の部分を漢字で書け、という問題が出ました。

その解答には「多少」が圧倒的に多かったそうです。

正解は「他生」です。辞書には「多生」というものもありますから、これも正解にしましょう。

「他生」は、現在の生以外の生を意味しますから、前世か後世のことですし、「多生」は多くの生をいいます。

人と人との出会いは不思議なものであり、厳おごそかなものです。

道ばたで人とすれ違うとき、袖がちょっと触れ合うほどのささいなことも、深い深いご縁があるのだ。だからこそ、出会いのご縁を大切にしようというのです。

仏教では、全ての出来事には、原因があると考えますから、この世で偶然に見えることも、決して偶然ではなくて、長いのちの流れのなかで見れば、必然なんだと見る。

全てを「ご縁」と見る。それが、仏教徒の受け止め方なんですね。

生まれてきたことも、親兄弟との出会いも、夫婦の出会いも、みんな、偶然ではないんです。

必然なんです。

生まれてきたのは、そんな出会いのためなんです。

それは、幼い子どもには、直感的にわかる、いのちの自然な感覚なのかもしれません。

こんな詩があります。田中大輔君という3歳の男の子の詩です。その子がつぶやいたことを、お母さんが書き取ったものですが、「ママ」という詩です。

ママ

あのねママ

ボクどうして生まれてきたのかしってる？

ボクね ママにあいたくて

うまれてきたんだよ

(川崎洋編『子どもの詩』より)

お母さんは、この言葉を聞いて、感動なさったに違いありません。

そして、「私も、この子に出会うために、生まれてきたんだ」と、思われたかもしれませんね。

私たちは、同じ時代、同じ世界に生まれてきた「いのちの仲間」です。
私たちが、同じ時代、同じ世界に生まれてきたのは、たがいに助け合い、学び合うためなんです。
何のために、助け合い、学び合うのかといえば、それは、「しあわせになるために」です。

この歌にも、「しあわせになるために、誰もが生まれてきたんだよ」(三)、「しあわせになるために、誰もが生きているんだよ」(三)とありますね。

さて、皆さん。皆さんは、しあわせですか。「しあわせ」って、どんなことだと思われませんか。

お金があることですか。
欲しい物が手に入ることですか。綺麗なお家に住めることですか。
温泉旅行に行けることですか。ご馳走が食べられることですか。

ある人に聞きますとね、「しあわせ」って、健康で、お金があることなんだそうです。
お金があったら、何でも手に入る。
健康だったら、何でもできる。

なかなか心惹かれる意見ですが、皆さんも、そう思われますか。
「そうだ、そうだ」と思われるかもしれませんが、まあ、それは、煩惱の見る夢でしょうね。

健康は、いずれ損なわれますし、何でも手に入るほどのお金を持ったら、不安で仕方がないですよ。
仏法は、しあわせになるための教えです。
ですが、その「しあわせ」とは、欲望が全て満たされるとか、何でも自分の思い通りになるとかいった、煩惱の見る夢のことではありません。
そうではなくて、煩惱の暗闇から、光の中に出ていく「しあわせ」のこと、「いのち」本来の味わいである「しあわせ」のことですよ。

この歌でも、そんな「しあわせ」が歌われています。こうですよ。

「春来れば 花自ずから咲くように (9)、秋くれば 葉は自ずから散るように (10)」
「夜が来て 闇自ずから染みるよう (21)、朝が来て 光自ずから照らすよう (22)」

草や木は、自然の営みに全てをゆだねて、一瞬一瞬をあるがままに生きている。
それぞれの「いのち」を生きている。それは仏教の言葉でいえば「自然法爾 (じねんほうに)」です。
私たちの受け止め方として言えば、「あるがままに」ということでしょうね。

生まれたばかりの赤ちゃんや小さな子どもを見ていると、本当に無邪気に生きているなあと思いませんか。
笑うにしろ泣くにしろ、あるがままを生き活きと生きています。
私たちの誰もがあのような姿で生きている時期があったはずですが。
それがいつのまにか手足の縮こまった生き方になってしまっているように思います。
何が私たちを生き活きとさせてくれないのでしょうか。

親鸞聖人は、それは私たちが鬼神に縛られているからだ、と教えて下さっています。
鬼神の「キ」は「鬼」、「ジン」は神様の「神」です。
親鸞聖人の時代には、人間に御利益を与えたり崇りをなしたりする仏さまや神さまが、ずいぶんと現実味を持って信じられていたようです。
こういった鬼神のご機嫌を損ねないように、お供え物をしたりお敬いしたりしなければ、崇りという形で災いが降りかかってくる。
そのような恐れが生活の隅々にまで入り込んでいたと考えられます。

南無阿弥陀仏と称えることは、このような鬼神から解放されることを意味していました。
今の時代、神さまや仏さまと言ってもあまり現実味がありません。
しかし私たちの生活の中にも、形はありませんが、私たちの心を縛り、操ろうとする様々な力が入り込んでいます。

例えば「世間様」というのがその一つです。

「そんなことをすると、世間で笑いものになる」とか、「世間様に対して恥ずかしい」という意識を私たちは持っています。

具体的に誰彼ということではなくて、漠然とした存在ですが、世間様という鬼神がいるのです。

私たちがなかなか「しあわせ」になれないのは、ひとつには、他人と比べるからです。
世間を気にするからですよ。

世間の価値観で、他人と比べるから、自分が不幸に思えるのですね。
あんな車をもっていない、あんな家に住んでいない自分が、不幸に思えるのですよ。
ですが、生きるというのは、本来、そういう比較の問題ではないでしょう。

草や木は、季節の移り変わるままに、花が咲き、葉が落ちる。
そこには「いのち」そのものの輝きがある。
「柳は緑、花は紅（くれない）」なんですよ。

梅が桜を気にしますか。

梅は梅、桜は桜。

全てが、それぞれの「いのち」を生きることで、輝いているんです。
私たちも、そうなんですよ。誰と比べることもなく、それぞれの「いのち」を生きることで、輝くのです。

それが「しあわせ」だと思います。

そんな「しあわせ」になるために、誰もが生まれてきたんですよ。

「いのち」のままに輝いて生きるために、生まれてきたんですよ。

人間として生まれてきた私たちは、本来、そんな「しあわせ」を生きられるようになっているのです。
私たちはみな、そんな「しあわせ」を生きるために、生まれてきたのです。そのことに気づきなさいと、仏法は教えているのです。

思えば、同じ時代、同じ世界に生まれてくるだけでも、奇跡でしょう。
そのうえに、人生が交差して、出会うとなれば、よほどの「ご縁」があると思えませんか。
同じ時代、同じ世界に生まれてきても、ほとんどの人とは出会わないのですからね。

しかし、人の出会いは、幸せな出会いばかりではありませんね。

苦しい出会いもあれば、悲しい出会いもある。

ときには、傷つける出会いも、傷つく出会いもあるのです。

ですが、どんな出会いも、偶然ではない。

「ご縁」に軽い重いがあっても、どんな出会いにも、出会うべき「ご縁」があるに違いない。

人生に偶然はない。そう受け止めることが大事です。

偶然というのは、意味がないということでしょう。

私たちは、意味のない人生は、生きられません。

生まれてきたことに、そして、人との出会いに、必然を感じてこそ、私たちは、自分の人生に、主体的に関わっていけるのですよ。

人は、出会いによって、学び、成長していきます。

ですが、幸せな出会いばかりでは、学ばせんね。苦しい出会いもあってこそ、あるいは、出会いのあとの悲しい別れもあってこそ、私たちは、学ぶのです。

「悲しみの花の後からは 喜びの実が実るように」(12)

「悲しみの海の向こうから 喜びが満ちて来るように」(24)

私たちの日常的な感覚から言えば、「悲しみ」から「喜び」が生まれてくるということは、まず、ありませんね。

悲しみは悲しみ。喜びは喜びです。

「親が死んだあと、調べてみたら、大きな財産が残っていた」、なんてのはダメですよ。

そうではないのです。

「悲しみ」から「喜び」が生まれてくる。

この「悲しみ」というのは、実は、自分の本当の姿を知った悲しみのこと、生きていることそのことの悲しみなんです。

それは、こういうことです。

私たちは、「自分のことは自分が一番よく知っている」と思っておりますけれど、本当は、そうではないんですね。

たとえばです、私たちは、たいてい、自分のことを、善人だとまでは思わなくとも、けっして悪人だとは思っていませんね。

むしろ、悪いことなんか、何もしていないと思っている。

しかし、人間は罪を造らないで生きていくことはできないのですよ。

生きるためには、食べねばなりませんでしょう。食べ物は、肉や魚だけでなく、米も野菜も、みんな生きていたものなんです。

私たちは、生き物のいのちを奪わずには生きられないのです。

ですから、仏法を聞いて、つまり、「いのちの真実」を聞いて、自分のいのちも、食べ物のいのちも、同じ「いのち」なんだと、本当に気づいた人は、罪の意識に苦しむに違いないんです。

それなら、食わずにおれるかといえ、生きようとするかぎり、食わずにはおれないんです。

思えば、生きるということは、計り知れないほど罪深いことなんですよ。

念仏者の榎本栄一さんに、そのことへの気づきを詠んだ、こんな詩があります。「罪悪深重（ざいあくじんじゅう）」という詩です。

罪悪深重

私はこんにちまで

海の 大地の

無数の生きものを食べてきた

私のつみのふかさは

底しれず

(榎本栄一「罪悪深重」『詩集 煩惱林』より)

食べ物のことだけではありませんね。

「自分は間違っていない、悪いのは相手だ」と、はらわたが煮えくりかえって、不平不満や愚痴ばかり言っているのも、気づいてみれば、鬼ですよ。

「悲しみから喜びが生まれてくる」という、この「悲しみ」とは、そんな「自分に出遇った」人の、このころの底から湧いてくる「悲しみ」のことなのです。

それは、生きてることそのことの「悲しみ」なのです。

仏教の言葉で言えば、「罪悪深重の自覚」を得た悲しみです。

自分は鬼だったという、深い悲しみが、仏の手に支えられていることに気づいた瞬間、大きな喜びに変わるのです。

聞法とお念仏の生活のなかで、自分の殻（から）が割れて、謙虚になったとき、私を生かそうとしてくださっている総てのものに、自ずと手が合わさりますよ。感謝せずにはおれなくなりますよ。

「感謝」というのは、「謝を感じる」と書きます。「謝」というのは、これ一字だと「あやまる」と読みます。本当の「感謝」というのは、「ありがとう」だけではなくて、「ありがとう」と「ごめんなさい」が合わさった気持ちのことなんですよ。

念仏詩人の木村無相さんに、こんな詩があります。「自炊」という詩です。

自炊

たなの上で
ネギが
大根が
人参が
じぶんの
出を待つように
ならんでいる

こんな
おろかな
わたしのために…

(木村無相「自炊」『念仏詩抄』)

ネギが、大根が、人参が、こんなおろかなわたしのために、「いのち」をめぐんでくれる出番を待っている。

思えば、「勿体ない」ことです。

私たちは、大自然の「めぐみ」で生かされて生きているのです。

〈さだ〉さんの歌の、最後の4行を読みます。

私が生まれてきた訳は (25)
愛しいあなたに出会うため (26)
私が生まれてきた訳は (27)
愛しいあなたを護るため (28)

〈さだ〉さんは、ここに歌われている「私」という言葉に、あるいは、法然上人をイメージなさっているのかもしれませんが。

ですが、私は、私たちを見まもってください、支えてくださっている「仏様」を、イメージいたしました。

私たちは、みんな、「いのち」の奥底に「仏性（ぶっしょう）」があります。

仏性というのは、仏になる可能性のことですが、「いのち」あるものには、全て仏性があるんです。ですが、ご縁がないと、この仏性が目覚めないのですね。

仏性が目覚める一番大きなご縁は、仏法に出会うことです。

いのちあるものには、全て仏性がある。犬にもネコにも、仏性はあるんです。ですが、仏法に出遇えるのは、人間だけなんですよ。

本当の「しあわせ」は、仏性が目覚めることにある。

私たちは、みんな、「しあわせ」になる可能性を持って、生まれてきたんですよ。

そのことを教えているのが、仏法なんです。

私たちは、すでに仏法に出遇っているんです。どうぞ、このご縁を大切にしてくださいように。

人間に生まれてきた「しあわせ」を知るためには、仏法を聞くことです。

聞法することが大事ですね。